



複数性を持つこと

立花, 佳澄
中川, 雅道

(Citation)

研究紀要 : 神戸大学附属中等 論集, 5:7-15

(Issue Date)

2021-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012678>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012678>



実践報告

複数性を持つこと

To have plurality

立花 佳澄, 中川 雅道

TACHIBANA Kasumi, NAKAGAWA Masamichi

『源氏物語』では、性格も立場も様々な女性たちが光源氏と関わり、その関わりに葛藤する様子が描かれている。これらを知ることは、「自己・他者の中に複数性（複数の視点）を持つ」ことでもある。高校1年生の国語総合の授業の中で、登場する女性の中で自分が最も魅力的だと思う人を挙げ、その理由をプレゼンテーションする活動を通して、多様な価値観を知り、複数性を持つことについて考えた。

キーワード： 複数性、日本の古典、源氏物語、多様性、総合単元学習、アクティブ・ラーニング

Key words: plurality, the Japanese classics, The Tale of Genji, plurality, values, active learning

I はじめに

なぜ生徒は古典を学ぶのだろうか。これは国語科教論として考え続けるべき問いであり、ひいては「なぜ我々人間は古典を学ぶのだろうか」という命題でもあるだろう。

単元設定に先立ち、生徒に「古典は本当に学ぶ必要があるのだろうか。またなぜそう考えるのか」と問いかけた（実施日 2020年6月8日、対象4年¹⁾2組生徒32名）。すると「必要だ」「不必要だ」と答えた生徒はそれぞれ13名ずつ（約40%, 40%）、「どちらでもない・その他」と答えた生徒は4名（約20%）いた。図表1は回答内容の一部である。

古典に出てくる言葉の多くは我々が日常会話で用いる言語ではないので、いわゆる「これから生きていく上で必要な知識・技能」とであると認識され難い。まして、読むために必要な古典文法を習得することは生徒にとって学習の動機付けがしにくいものである。しかしその本質を問うた時、生徒は真摯に「なぜ学ぶのか」に対する自分なりの考えを表明したのである。我々はなぜ古典を学ぶのだろうか。1000年以上読み継がれてきた古典には何かしら面白さがあるはずだ。その面白さに触れ、古典

が生涯の友となるような体験はできないだろうか。このような課題意識から、生徒が自ら古典の魅力を見つけられるような仕掛けづくりをしてみようと考えた²⁾。

古典は必要か/なぜそう考えるのか

必要	10年でも1年でも大きく変わるものが多い中、古典の学習によって世の中がどんな風にならなってきたかを細かく知ることができる。昔を見ることが今からを良くする一歩だと思う。古典を読み解く力やその内容は、相手を理解したり、自分の気持ちを整えたりできるから、間接的に仕事をはかどらせることにもつながる。
不必要	古文が良い文章・ためになる文章ならば、現代文で書いてくれた方が読みやすい心に伝わる。外国語のようなものだから、それなら英語以外のフランス語とかを学んだ方が、グローバル社会において役立つと思う。現代を生きていく上で要らない。企画書とか社内人とコミュニケーションをとる上で古文の言葉は使わない。
その他	人による。古典に対して興味や目的意識を持つ人は積極的に学んでいいと思う。日本の教育はまだ偏差値最重要主義なので、それがなくなるとは限りはある程度は全員学ばなければならないが、「学び」は個々人が自分らしく生きていく為に必要な自分探し、興味の発見、心の支えを提供する為のものだと思うので、「役立つ」「必要」は教育者が決めてしまうのではなく、学ぶものが定めるべきである。

図表1 生徒の回答内容の一部

現代の知識人による古典への評価を探ることは、古典の世界の人々を知るための手がかりの一つになるだろう。2014年から2020年にかけて、河出書房新社より『日本文学全集』が出版された。全30巻から成るこれらの作品は、著名な作家陣による

古典の新訳集である。編集者の池澤（2020）は以下のように述べる³⁾。

日本人とはいかなる人たちであるか。この限定された国土で人はいかなる精神を養ってきたのか。（中略）第一は、恋が好きであること。（中略）第二は、英雄崇拜が薄く、むしろ敗者への共感の思いが強いこと。（中略）第三は、平安期まででだけれど、女性の歌人や作家が多かったこと。

これを導入として、本単元では「恋」に焦点を当て、平安期の人々の恋愛感覚や血縁関係についての知識を得させることにした。特に妻問婚や一夫多妻制、家柄や後盾の重要性等、現代の感覚とは異なる点に気づかせるようにした。

では古典における「恋」とはどのようなものか。これを知るには、多くの女性たちの「恋」が描かれている『源氏物語』が手がかりとなるのではないだろうか。原文で読み解くにはかなり難解な作品であるため、導入として漫画⁴⁾の一部を読ませた。この時、多くの登場人物の識別や心情への気づきを促すため、4名ずつの小集団に分かれて登場人物を割り振り、台本のように声に出して読ませる手法をとった。

登場人物や設定への理解が少し進んだところで、本単元の意図を知らせた。『源氏物語』では、性格も立場も様々な女性たちが光源氏と関わり、その関わりに葛藤する様子が描かれている。これらを知ることは、「自己・他者の中に複数性（複数の視点）を持つ」⁵⁾ことであるとも考えられる。自分以外の他者が何に喜び、傷ついたのか。自分ならばその時どう考えるのか。たとえ共感し得なくとも、想像してみることは可能か。そして、現代との繋がりはどこにあるだろうか。『源氏物語』を通して共に考えてみたいと投げかけた。

まずは、エピソードや行動が比較的わかりやすく描かれ、現代でも物の怪に関する議論が多い六条御息所に着目し、「車争い」の原文を抜粋して読解した。生徒にとって品詞分解や現代語解釈をすることは難解な課題であったが、古語辞典で語義

を調べたり、小集団で確認させたり、適宜漫画を読ませたりしながら進めた。

そして、授業者が原文や論文等の資料から読み取った六条御息所の魅力をまとめ、プレゼンテーションを披露した。魅力を伝える工夫として、彼女を端的に表すキャッチフレーズを考えて提示したり、行動やセリフをピックアップして現代語と合わせて紹介したりした。

さらに生徒に夏季休業中の取り組みとして図表2の課題を与え、授業で取り扱っていない様々な女性について自分で調べまとめて他者に説明する準備をさせた。

【課題】『源氏物語』に登場する女性の中で、あなたが最も魅力的であると思う人は誰ですか。一人選び、魅力的である理由をプレゼンしてください。

【条件】①2種類以上の複数の資料を根拠とすること。原文、現代語訳、解説書、論文、漫画等どれを組み合わせても良い。インターネット上の解説サイト等を利用しても良いが、その場合は必ず文献と組み合わせること。）

②その女性を端的に表す「キャッチフレーズ」を考え、必ず入れること。

【方法】スライド作成（powerpoint等）

図表2 プレゼンテーション課題内容

作成したスライドは小集団の中で相互発表・相互評価させた（図表3）。特に相互評価の高かった者が代表者となり、学級全体の前で発表した。生徒は発表者のプレゼンテーションの良かった点を考え、自身の参考とした。

相互評価の観点

知識	2種類以上の資料に基づいて根拠を述べている
内容	プレゼンの内容がとても興味深く面白い
内容	女性の魅力がよく伝わってきた
作法	聴き手を意識してはっきりと話している

図表3 相互評価の観点

スライド作成から発表の過程で言語化した「魅力」について、さらに学級全体で話し合った。ここでのどのような共通点や相違点があるかを見つけ、それぞれの人物の立場や価値観を認識することで、人が多様な文脈や背景を持つと気づくだろう。こ

のことは「古典を通して、自己・他者の中に複数性を持つということ」になり得るのではないだろうか。

III 教材について

本単元での主教材『源氏物語』を選択した理由は登場人物の多様性にある。作中ではたくさんの女性が登場する。異なる背景や性格を持つがゆえに彼女らの取る言動は様々であり、それはその女性の価値観・生き方を表現しているとも言える。これらの女性に着目することで、共感したり、あるいは共感せずともなぜそのような行動をとったのかを考え、自分以外の他者がどのようなことに喜怒哀楽を感じたのかを想像したりすることができる。

このことは、自分の中に複数の視点を持ち、自分以外の複数の他者を考えることである。哲学者ハンナ・アレントの言葉を借りれば「複数性」を持つことである⁶⁾とも考えられるだろう。そして複数性を持つことは、「他者への寛容」、「すべての人に開かれている」というシティズンシップ教育の考え方⁷⁾にも通ずるのではないだろうか。

同じような趣味・価値観を持つもの同士の緩い繋がりはあるが、そうでないものやわからないものに対する排除の風潮というのは、近年より一層強くなっているように思う。『源氏物語』という古典の物語は「わからないもの」かもしれない。しかし、その架空の物語の中で悩み苦しみ喜びながら生きた女性を知ること、わからないものを知ること、複数の視点を持って他者を考えることに繋がるのではないだろうか。

IV 単元の構成・ねらい

1. 単元の位置

本単元は充実期⁸⁾国語総合の古典的分野に位置する。「意見や思考の展開を分析したり統合したりして、論理的・批判的にとらえ、多元的視点を持つことができる」「文学的作品や非連続型テキストから思想や感情を的確に捉え、表現の工夫に気付き自分の思考や表現に活用することができる」とい

う充実期の目標に基づく。

2. 単元の位置付け

本単元と、現行及び次期学習指導要領の指導事項との関連を、図表4の通り位置付けた(p.4)。

3. 単元のねらい

源氏物語の女性に着目し、根拠を見つけながらその魅力を挙げさせる。言語化した「魅力」を小集団や学級全体で話し合うことで、どのような共通点や相違点があるかを見つけさせる。それぞれの人物の立場や価値観を認識することで、人が多様な文脈や背景を持つということに気づかせる。以上の活動を通して、自分を社会の中に位置付け、他者とともに課題を解決していくための自立・協同・創造の力や、異なる考え方とそこにみられる立場や価値観を捉える姿勢を培う。

VI 分析・考察

『源氏物語』に登場する女性の中で、あなたが最も魅力的であると思う人を一人選び、その魅力をプレゼンテーションする課題に対して、生徒は驚くほど熱心に取り組み、その質は素晴らしいものであった。また、互いのプレゼンテーションを聞いた後の感想も「とても面白かった」「紫の上への愛が伝わってきた」「私も共感した」等の前向きな意見が多数見られた。「誰かの魅力を見つけるためにその人物に関する資料を探し、とった言動に思いを馳せてみることは、当事者だけでなく周りの他者との関係性を考えることでもある。以前にもまして愛着がわき、「彼女はこんなにも魅力があるのだ」ということを誰かに知ってもらいたくなる。自分の好きな俳優やキャラクターのことを「推し」と呼んで応援するのは、10代の子どもたちにごく自然に見られる光景であるが、今回の学習はこの感覚に似ていたのかもしれない。

単元の最後に、全体を通して考えたことを問うた。中には「なぜ古典を学ぶのか」について再考したものもあった。以下に、生徒の記述内容から考察できることを述べる（引用箇所の傍点は筆者による）。

A 基礎力		B 思考力		C 実践力
知識・理解	技能	思考・判断・表現		関心・意欲・態度
知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
・古語や漢語、伝統的な言語文化に関する内容を理解することができる。 ・物語を、表現技巧や歴史的背景にも注意して読み、感情と表現の理解を深めることができる。		批判的思考力 ・ものの見方や感じ方の多面性を理解することで物事に対する視点や観点を見出し、正当な評価をすることができる。 体系的思考力 ・様々な情報を収集し、多面的・多角的に精査し構造化して、ものの見方や感じ方を形成し深めることができる。		探究力・協同的解決 ・課題に対して自ら情報を集め、経験や既存の知識を整理して考えをまとめて、取り組むべき問題を発見することができる。 ・多元的な視点や批判的な思考を用いて評価し、新たな解決を見つけることができる。
				自己や他者や異文化との関係に対する理解 ・自己や我が国の文化に対する理解をもとに作品を読み、他者や異文化との関係性について理解を深め、多元的な視点や批判的な思考を踏まえて、自分の考えを的確な言葉を用いて表現することができる。

図表4 単元の位置付け

色んな教科で海外と日本を比較し、異文化理解をしようとしているけれど、正直源氏物語を読めばそれに匹敵しそうなくらいの衝撃的な文化を知れると思う。さすがにこれは言いすぎな気もするが、僕はそれくらい源氏物語が衝撃的だった。(A)

昔にも今と同じように女性観での争いやいざこざがあり、和＝おしとやか、落ち着きというイメージが間違っていると気づかされました。また、文化の違いや昔の女性としての生き方、求められることには現在と差があり、実はとっても深いのではと新たな疑問が生まれました。(B)

光源氏モテすぎ！どんな顔なのか気になる。
 (中略) ジョジョみたいに二部があると知ったのでぜひ読みたいと思う。(C)

例えば末摘花のような辛抱強く好きな人を持ち続ける生き方は、他人からすると可哀想に感じても、本人的には結果拾ってもらえて幸せだったのかもしれない、というように本人の幸せと客観的に考えた幸せはイコールではないのではないかと考えました。(D)

例えば「六条御息所みたいに、自分を好きになってくれない人を好きになっても苦しむだけなんだな、そうはならないようにしましょう」「花

散里のような生き方は楽そうだな、参考にしてみよう」など、色々な人生を知ることができると思った。(E)

昔、男の人と女の人が初めて出会った時点では女の人は男の人から見て「物」なのかなと思った。実際、源氏は紫の上を「可愛い」や好きだった藤壺の「代わり」として好きになり、自分の身の近くに持っていく。この時点で紫の上は「人」としてではなく「物」として扱われているように、私は感じた。他の女性も同様に源氏のその時の気分や状態に振り回されて関係を持つことが多い。しかし、時を共に過ごしていくうちに源氏は「物」の「人」な部分に惹かれていき、「人」と「人」の関わりへと変化していったと思った。

なのでこれが昔の時代では普通なのかもしれないが、女の人々の心の強さと、男の人の立場的な強さを感じ、今とは少し違うと思った。(F)

作品(フィクション・ノンフィクション問わず)を自分の心に落としこんで、生きていく上のエネルギーや教訓にできることの素晴らしさ、有難さを知った。(G)

『源氏物語』はすべての人が「生きる」という感じがする。(H)

多種多様な人々の個性と価値観を知れた。また、

それを全肯定する光源氏はすごいと思う。(I)

生徒が『源氏物語』という作品そのものが持つ面白さを味わっているとわかる。Aにとって光源氏の生涯や彼に関わる女性たちの物語は、これまでの読書体験の中であまり出会ってこなかった種類のものであったようだ。BやFが指摘するように、平安貴族の生活、出自・後ろ盾という考え、光源氏の性格や価値判断、女性たちの生き方等、様々な面において「古くて新しい」ものでもあっただろう。

Cは古典に対して苦手意識を持つ生徒であるが、今回の学習に積極的に取り組み、代表者としてクラスでプレゼンテーションを披露した。物語の「続きを読みたい」と考えている。D、Eはクラスメイトのプレゼンテーションを聴き、自分が調査した人物以外のことも知ることによって、自分がどう生きたいかという価値判断に結びつけている。

また、女性たちと光源氏との生涯にわたる関わりを知ることが、一人(あるいは複数)の人間の生き様を知ることでもあるという気づきから、人が「『人』な部分に惹かれて」いくのだ(F)と考え、「生きていく上のエネルギー(G)」,「すべての人が『生きる』」感覚(H),「生」の「全肯定(I)」であると捉えた生徒もいた。

作品として読み応えがあり面白い素材を選ぶことが、生徒の学習意欲に不可欠であると改めて認識できよう。

では、古典である必要性はあるだろうか。もう少し生徒の感想を挙げてみたい。

当時の価値観や認識などを学ぶことはとても有意義だし、学ぶべきだと思う。ただしそれが中学生などで必要かと言われればNoで、学びたい人が学べばいいと思った。(J)

話の内容には共感できないが、このような考え方をしている時代があった、このような価値観があるということを知ることが必要だと思った。それぞれ人は違う価値観を持っており、それを知ることが世界の課題を解決する第一歩となるのかも知れない。古典は現代語訳された

もので読めばいいと思う。(K)

はじめは「そんなのいらないし使わないから」という理由で必要ないと思っていたが、それとは違う理由で、やはりなくてもよいと思う。(中略) 知ることはとても楽しかった。でもだからこそ、「暗記しなくてはならない」「単語は覚えなさいといけない」「これは正しくてこれは正しくない」など、〇×がつくテストや授業をするのは勿体無いと思う。(L)

「巨人の肩に立つ」この言葉が表す通り、先人の残した遺産の上に立てば今よりもっと前へ、学問でも進めるのではないか。要するに、古典はもうすでに現代語訳されているのだから、それを現代文の分野で行ってもよいと思う。なぜなら古典はれっきとした物語だからである。

古典は原文を読む必要性はないが、そこにある教訓や物語は大いに学ぶ意義はある。現代語訳されたものを分析する。文法を覚えるより、そこに時間を割いてはどうかと考えた。(M)

他の女性たちが一人一人主人公らしく生きているようで、主語をはっきりしない、色々な言葉をはっきり書かない古文らしく全員が確固として存在していた、と思う。(N)

読んでいてなんでこんな行動を取るかわからなかったシーンが、よく読んで別の解釈を聞くことで理解できたということもあって、この作品を通じて自分の視野が広がったような気がして、多角的に物事を捉えるのは大切だなと感じました。(中略)『源氏物語』を読むに当たって、インターネットや書籍で現代語訳を調べて読みました。訳は、資料ごとに違っていました。同じ古文の文献でも、訳す現代人によって解釈が違い、違う表現となっていて、それぞれ違った物語になるのが面白いと思いました。そういう良さも古文にはあるのだと考えます。(O)

古典だからこそさらに捉え方が何通りもある

のでは、と感じた。今は迷いなく「古典は必要である」と感じている。古典から吸収することは多く、それ以前に面白い。この先もその面白さ、奥深さを世に残すために、古典は必要だと思う。(P)

現代語訳された文章を読むと、現代語訳した人の視点が入ってしまうため、物語を複数の視点から見えないな、と思いました。物語を様々な視点から見る、というのが古典を学ぶということなのかなと、思いました。(Q)

現代文にない良いところは、それを書かれた時代には今のよう文明が発達していなかったということだと考えた。今のように世界中が繋がっておらず、便利なものがない時代の人たちが書いたものは純粋に自分の価値観や素直な気持ちを言葉にしたものが多く、それは情報がたくさんあって、効率の良いやり方や、自分とは全く異なる文化境遇を持つ人がいるということを知ってしまった現代人には戻れないところだと思う。そんな大昔の人が生み出した文章を原文そのままに解説できることが古典を勉強するメリットだと思った。(R)

Jのような意見も一定数あるだろう。古典を学ぶことは意義があると思うが、それはやりたい人がやればよいという考えである。Jにとって内発的な動機付けにはなっていないのである。

K, L, Mは手段としての古典文法は不要だと捉えている。現代語に翻訳する過程には価値を見出していない。

N, O, P, Q, Rの意見は古文の持つ「わからなさ」について考えようとしているように見える。特にRが指摘したことは重要であろう。私たちはわからないことに対してどう向き合ってきたのだろうか。古典がなぜ様々に解釈され続けているのか、考えただろうか。Nが指摘したように、「主語がはっきりしない、色々な言葉をはっきり書かない」からこそ、なぜ書かれていないのか想像の余地があっただろう。例えば六条御息所が生霊になって葵

の上に取り憑いたと考えられている背景にあるのは平安時代の人々に生まれた「良心」の発露であるかもしれないとか⁹⁾。

解釈されたものは、Pの言う通り「現代語訳した人の視点が入ってしまう」。だからこそMが提案するように、私たちは「現代語訳されたものを分析する」ことができる。様々な解釈の余地がある複数の情報の読み比べはすでに新学習指導要領等で指摘されている通りであるが、生徒の実感としても挙げられたことの意義は大きく受け止めた。今後の古典教育開発のヒントとなるだろう。

肯定、否定をするのではなく、自分の中でまともでなくてグレーのままでいることも必要じゃないかと思う。価値観は白黒つけられるものではないし、善と悪とかで分けなくてもまたそれも一つの考えだと思う。また、何かに役立てようと気負うものでもないと思う。全てが有用だからという学びでは面白くないと思う。なんとなく貯めていて、いつかふとした瞬間に思い出すようなものが古典だと感じる。(S)

はじめに「古典は必要か」と問われた時、私の答えは圧倒的にNoでした。今それが変わったのか、結論から言うと答えはYesです。そりゃもちろん人生の中では使わないし、何言っているのかよくわからないこともたくさんあります。だけど今しかやれない「古典」というものに触れたのは、とても自分にとってプラスの要素が大きかったと思います。授業でやらされない限り、絶対にやらなかった古典。深く考えることももちろんやらなかったと思います。だけどそれができたことで、私は新しい世界を見つけられたし、現代との違いも共通点も見出すことができました。やる前は「めんどくさい」が本音だったけど、いまは「めんどくさいけどちょっと楽しい」に変わりました。(T)

S, Tは、考えることそのものに価値を見出している。古典は「何かに役立てようと気負うものでもなく」、「なんとなく貯めていて、いつかふとした

瞬間に思い出すようなもの」であるとする。「授業でやらされない限り絶対にやらなかった」し「深く考えることもなかった」という T の気づきは、深い思考に至った偶然の出会いが実は「古典という枠組みの必然」によって起こり得たのだ、ということを示しているのではないだろうか。

他者を「受け入れる」のではなく「いることを知る」というのはなるほどなと思った。確かに「受け入れる」だと、自分より優れた人がいることを受け止めて羨ましくなったり、自分より劣っているものに対しては上から目線になってしまうようなイメージがして苦しくなってしまう。「いる」だと、あくまで自分の目線から世界を見ていて、その登場人物として世界が回っているイメージ(ある意味自己中心的)があって、自分は自分なのだと認めて楽になれる気がする。(U)

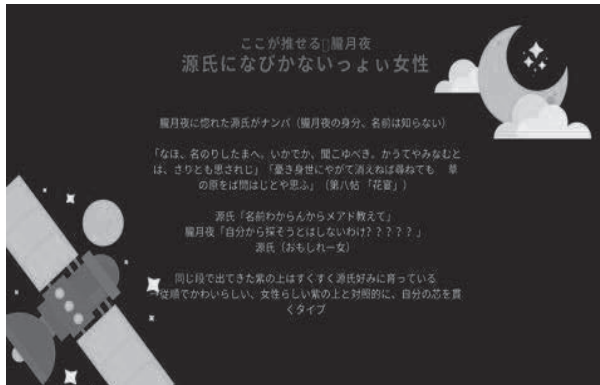
恋愛に人生を狂わされる人とそうでない人にはどんな違いがあるのだろうと思った。恋愛に依存してしまっただけで自分のものにしないと気が済まない人は上手いいかないケースが多かったけど、待ち続けた女性は結局幸せになれていた気がする。でも、なぜ大好きな人とずっと一緒にいたい女性が源氏に適当にあしらわれることが許されるのか、私は光源氏のような人がいることは知れたけど、到底理解できなかった。藤壺は恋をしてしまった自分を責め、忘れてほしいと願ったし、このことから何かを守るためだったり恋愛が原因で他者への依存や許されることを拒んで忘れ去られたい人も世の中にはいると思った。自ら命を絶ってしまう人には多分他者が絡んでいるから、自己責任ではない。(V)

U が考えたことは、まさしく授業者が単元のねらいとして考えたことそのものであった。「あくまで自分の目線から世界を見ていて、その登場人物として世界が回っているイメージ(ある意味自己中心的)があって、自分は自分なのだと認めて楽になれる気がする」というのは大変興味深いアイデ

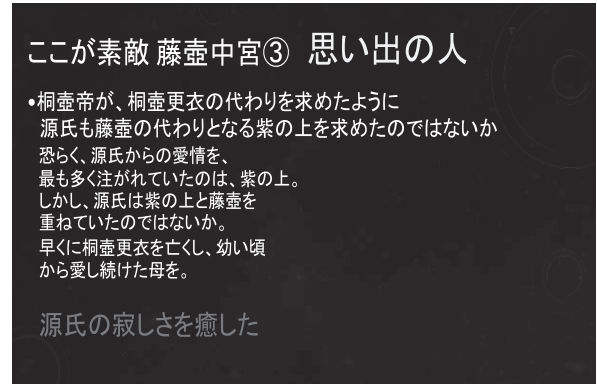
アなのではないだろうか。V が書いた「自ら命を絶ってしまう人には多分他者が絡んでいるから、自己責任ではない」というのは、授業者が提示した「自己責任」への問題提起への回答だと思われる。「『複数性』＝個性の徹底的肯定」¹⁰⁾のヒントが『源氏物語』にあるとし、「強いもの・良いものでないとダメなのだろうか。自己責任でいいのだろうか。人は誰でも『忘却の穴』¹¹⁾に落ち込む可能性を持っている。そうならないためにはどうすれば良いのだろうか」と問いかけたのである。この議論については今回広げられなかったのが残念であった。学校という場でも、その先の社会においても、多数派が承認されやすい中で少数の存在をどう捉えるかは大切なことである。このことについては生徒とともに今後考えていきたい。

『源氏物語』は、人が誕生してから命を終えるまでの一生、あるいは貴族社会の舞台から降りるまでの半生を描いている。だからこそ、生き方そのものが垣間見え、共感したり、理解できないと考えたりすることができるのではないだろうか。そして、その事実があると知るとは、自分の中に複数の視点を持つということになるのではないだろうか。

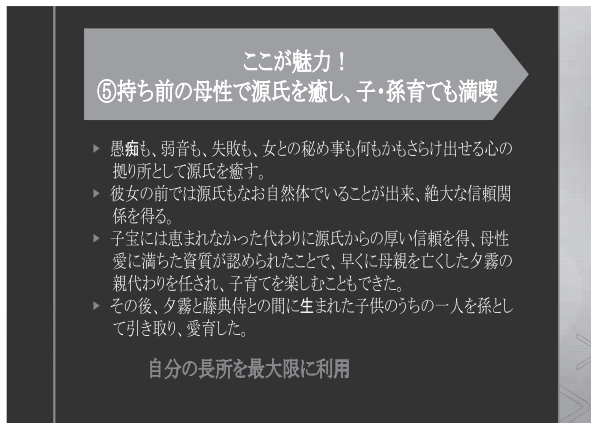
最後に、興味深いのは、生徒のプレゼンテーションの内容に性差が存在し得ることである。「光源氏になびかない」「芯が通っている」等、女性への共感的魅力を挙げた生徒は女子生徒に多く(作品 1, 2)、「(守ってあげたくなるほど)可愛い」「忘れられない」等、女性を保護する・あるいは女性に保護されるような視点で魅力を挙げた生徒は男子生徒が多い(作品 3, 4)ように感じたのである。これはもちろん一概に言えることではなく、授業者が分類・意味づけることで一層性差の意識を助長する危険性もある。しかし、現代社会の男女格差¹²⁾の一因が、教育現場におけるジェンダーの固定観念の醸成にあるとしたら、これは疑問を持って考えるべきことなのではないだろうか。今後の課題としたい。



作品1（朧月夜）



作品4（藤壺中宮）



作品2（花散里）



作品3（紫の上）

謝辞

研究紀要発刊にあたり、同志社女子大学現代社会学部の松崎正治教授をはじめ、多くの方のお世話になった。厚くお礼申し上げる。

注

- 1) 授業者の勤務校は中等教育学校であるため、中等1年～6年生が在籍する。それぞれを中学1年～高校3年生にあたる学年である。本実践の対象である4年生は、高校1年生にあたる。
- 2) 本研究は、科学研究費助成事業基盤研究(C)「哲学資源としての漢文教材および学び方の開発に関する基礎的研究」の一環として行われたものである。
- 3) 参考文献[iii]特集記事「池澤くん、ご苦労であった。『日本文学全集』の完結を迎えて」より。
- 4) 参考文献[vii][viii]。
- 5) ハンナ・アレントの文脈における「複数性」である。Ⅲで後述。
- 6) 参考文献[i]。
- 7) 参考文献[x]。
- 8) 本校では発達段階に応じて中等1・2年生を「基礎期」、3・4年生を「充実期」、5・6年生を「発展期」と呼称する。本実践の対象である4年生は、充

実期2年目にあたる。

9) 参考文献[ix].

10), 11) 参考文献[i].小玉はアレントの「複数性」を「個性の徹底的な肯定」であるとした。また、難民の存在自体がなかったことにされた「忘却の穴」は格差社会の現代にも潜み、人は誰でも難民性を抱えていると指摘している。

12) 世界経済フォーラム (World Economic Forum) の公表[xi]では、各国における男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数 (Gender Gap Index : GGI) の日本の総合スコアは 0.652、順位は 153 か国中 121 位である (2020 年 3 月現在)。この指数は、経済、政治、教育、健康の 4 つの分野のデータから作成され、0 が完全不平等、1 が完全平等を示す。

文 献

[i] 小玉重夫 2013. 『難民と市民の間で—ハンナ・アレント『人間の条件』を読み直す』現代書館。

[ii] 勝又基 2019. 『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』文学通信。

[iii] 『文藝 2020 年夏季号』河出書房新社 2020。

[iv] 中村真一郎 1985. 『色好みの構造——王朝文化の深層』岩波書店。

[v] 川村裕子 2005. 『王朝生活の基礎知識 古典のなかの女性たち』角川学芸出版。

[vi] 紫式部著 阿部秋生、今井源衛、秋山虔、鈴木日出男訳 1994. 『新編 日本古典文学全集 20・源氏物語 二』小学館。

[vii] 大和和紀 2008. 『あさきゆめみし完全版 1』講談社。

[viii] 大和和紀 2008. 『あさきゆめみし完全版 4』講談社。

[ix] 増田繁夫 2016. 講演 源氏物語の六条御息所の物の怪. 京都語文 23 号 34-49.

[x] 池野範男 2014. グローバル時代のシティズンシップ教育—問題点と可能性:民主主義と公共の論理—. 教育学研究 第 81 巻第 2 号。

[xi] 内閣府男女共同参画局 2020. 「共同参画 2020 年 3・4 月号」 pp.13